Japanese Association for Religious Studies

Paul L. SWANSON and Clark CHILSON, eds.
Nanzan Guide to Japanese Religions
University of Hawai'i Press, 2006
xii＋466 pp. $45.00

山中　弘

入門書には一般に二つのタイプがあるように思われる。一つは、その領域を全く知らない人が読んでみて、一応は基本的な知識がわかるようにできているものである。こうした類のものは、いわゆるノウハウ本と呼ばれるもので、手軽に必要な知識を手に入れることができるという長所をもっているものの、ごく初歩的な知識だけで満足せざるをえず、その領域の最先端の知識や議論を知ることは難しい。もう一つのタイプは、一見、入門書のようなタイトルと体裁をとっていながらも、入門書とは名ばかりで、それぞれの専門家が高度な専門的知識を駆使して書かれたものである。これは、それぞれの領域の専門的な知識に接するという意味ではありがたいものの、全体としての統一も使い勝手も考慮されていないことが多く、編者の自己満足ぶりが目立つばかりで、入門書としての役割を忘れているものがある。それでは、英語圏の読者に向けて書かれたこの入門書はいずれのタイプに属するのだろうか。本書を一読してわかるのは、それがこれまでの入門書の通弊であった欠点を免れている出色の研究手引きだということである。本書は、初学者のニーズに応える様々な基本的知識や実践的情報を提供しながらも、日本宗教に関する最新の研究成果に基づいて書かれており、いわば「初学者にやさしい専門書」という読者の無い物ねだりの願望を満たしてくれる手引きに仕上がっている。学生であろうが、研究者であろうが、日本宗教に少しでも関心をもっている人なら誰でも、その問題意識と理解の程度に従って、日本宗教のそれぞれの領域へと導いてくれる実践的なナビゲーター、それが本書の基本的な性格であるように思われる。しかも、もう少し注意して読んでみると、本書は単なる入門書という限定されたジャンルには収まりきれない奥行きと幅の広さをもっていることがわかる。というのも、本書は、入門書という「表の顔」をもちながらも、同時に第一線で活躍する内外の日本宗教の研究者による、わが国の学界で自明視されたり等閑視されてきた事柄への問題提起をはらむというもう一つの顔をもっているからである。先に、本書を「初学者にやさしい専門書」と形容したのも、日本宗教の研究を志す海外の初学者の願望に徹底的に配慮しながらも、同時に日本の学界にもインパクトを与えようとする非常にチャレンジングな「専門書」という性格も備えているように感じたからである。

さて、編者スワンソンとチルソンによる序論を読むと、本書が現在のかたちにまで「進化」してきた過程が具体的に詳述されている。本書がもっている構成のおもしろさや見事なまとまりが実に多くの人々の意見と編者たちの工夫によって作られていることがよくわかるとともに、海外の研究者たちとの幅広い

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

ネットワークを含めて、本書の出版を可能にした編者たちをはじめとした南山大学・南山宗教文化研究所のスタッフの能力の高さにあらためて感心するとともに、本書の題名が日本宗教への「南山の研究入門」となっていることに、この研究所に対する編者たちの矜持を感じることができる。ともあれ、ここでは本書の誕生の初発の動機だけを確認しておこう。この企画の背景には、海外における日本宗教に関する研究インフラの立ち後れが存在している。編者たちによると、日本宗教全般を概観した著作は一九六六年のJ・キタガワの *Religion in Japanese History* 以来刊行されておらず、仏教、神道に関する概説やそこで取り上げられる論点も、六〇年代、七〇年代の古い学説に基づいたものになっているという深刻な研究状況が存在していたという。こうした状況を改善すべく一九九八年に「日本宗教史ガイドブック・プロジェクト」が始動し、それから八年ほどの歳月を経て本書として結実したわけである。

前置きが長くなってしまったが、もう少しその内容を紹介するために、まず、全体の目次を掲げてみよう。

編集者の序論

伝統

日本の宗教　ロバート・キサラ

神道　ノルマン・ヘイヴンズ

仏教　ジャクリーン・I・ストーン

民俗宗教　イアン・リーダー

新宗教　トレヴァー・アストレー

日本のキリスト教　マーク・R・マリンズ

歴史

古代日本と宗教　松村一男

日本古代宗教史と古典時代の宗教　吉田一彦

中世期——一一世紀から一六世紀　ウィリアム・M・ボディフォード

初期近代日本の宗教　ダンカン・リュウケン・ウィリアムズ

近代宗教史　林　淳

現代日本の宗教　島薗　進

主題

日本の儀礼文化——シンボリズム、儀礼、芸術　リチャード・K・ペイン

文学と聖典　ロバート・E・モレル

日本における国家と宗教　ヘレン・ハーデカー

地理学、環境、巡礼　バーバラ・アンブロス

日本における思想史　トーマス・P・カスリス

日本宗教におけるジェンダー問題　川橋範子

調査

日本の参考図書、資料、図書館　牧野康子

日本宗教の研究における古文書館の利用　ブライアン・O・ルパート

日本宗教のフィールド・ワーク　スコット・シュネル

年表

日本宗教年表　ウィリアム・M・ボディフォード

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

この目次が示すように、全体は「伝統」「歴史」「主題」「調査」「年表」という五つのセクションに分かれており、いわば日本宗教研究の基礎編、応用編、実践編が巧みに配された形になっている。そして、それらの骨格をなす最初の三つのセクションの諸論文は、編者の編集方針に従って、次の四つのポイントを押さえて書くように求められている。①鍵となる術語の定義、②その分野の概観と主な関心領域、③この領域の近年の業績、研究の現状の概要、④そこでの重要な話題と論争点、将来的な研究点、である。この方針によって、各論文は個別的な論文の単なる寄せ集めではなく、ガイドブックという本来の目的のもとに統合されるように工夫されている。しかも、個々の論文の記述は入門書にありがちな無味乾燥な単なる解説ではなく、文体も含めて担当者固有の問題意識から書かれており、それぞれ読み応えのあるものに仕上がっている。

次に、各セクションごとの論文の内容についてごく簡単な概略をおこないたいが、ここで取り上げられている話題や議論は当然のことながら非常に多岐にわたっており、日本宗教の専門家ではない評者が各論の内容について専門的なコメントを加えることはできない。そこで、ここでは評者が理解した範囲で「さわり」だけ紹介させていただく。

最初の「伝統」は、最新の研究成果を踏まえて神道からキリスト教までのわが国の主要な宗教伝統について紹介、解説しているが、執筆者はいずれも宗教はもとより日本の社会にも精通している外国の研究者が担当しており、全体として、英語圏で入手可能な従来の概説書ではお目にかかれない斬新な語り口での説明を心がけているように感じた。最初のキサラ論文は日本宗教全般の概説の役割を果たしており、近年日本の学界でも話題になっている明治以降の宗教政策や宗教概念をめぐる議論を紹介することを通じて、日本宗教の現状と個性を解説し、日本社会において宗教が依然として重要であることを指摘している。次いでヘイヴンズは、手際よく神道に関する学問的な紹介をする一方で、「真珠」「空気」「タマネギ」という三つの比喩を使って、この宗教伝統を論ずる際の言説戦略を説明している。この三つの比喩の詳細に興味を持たれた方は是非とも本文を直接お読みいただきたい。アメリカの日本仏教の第一人者であるストーンの解説はとても手短に要約などできないほど専門的で多岐にわたっているが、黒田俊雄の「顕密体制」を中心として近年の中世仏教史に関する様々な学説や女性の役割についての新たな論点が紹介されており、この領域に関する彼女の学識の深さに驚嘆させられる。「民俗宗教」についても同様なことがいえる。四国巡礼について近年浩瀚な著作を発表されたリーダーはこの領域の最もふさわしい解説者であり、民俗宗教をcommon religionとして捉えなおすことを通じて、いかにして従来の民俗学を学際的な学問へと開いていくべきなのかなど、多くの興味深い提言をおこなっている。アストレーのものは、the New Religionsに該当する日本語の多様性、発展の時期区分、統計、所属など日本の新宗教を研究する際のいくつかの問題点を解説したうえで、主にその発展の背景と歴史を中心に論を進めているが、その研究の整理は欧米の学界における研究状況がよくわかるという意味でも興味深いものとなってい

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

る。マリンズの日本のキリスト教の解説は、彼が開拓した研究分野である「日本生まれのキリスト教」の調査研究を踏まえて、欧米発のミッション教会とは異なる日本人によるキリスト教受容の問題の重要性に注意を喚起している。

「歴史」の部分は、伝統的な細かい時代区分をやめて、古代、中世、初期近代、近代、現代という区分を採用し、従来の時代区分では収まりきれない思想やその運動の展開や影響を柔軟に理解できるように配慮されている。この時代区分で中心的な問題として取り上げている話題には、各執筆者の個人的問題意識がかなり反映されており、松村、吉田、島薗の各論文のように比較的一般的な通史的な体裁をとっているものから、林論文のように「仏教史研究」、「国家神道研究」、「新宗教研究」という日本宗教研究における重要な研究領域に焦点を当てて解説を加えるものまで多岐にわたっている。また、ウィリアムズは、現在に至るまでの日本の宗教構造を規定する江戸幕府の宗教政策や一般民衆の宗教性について興味深い指摘をしている。ボディフォードは、日本の研究者には「木を見て森を見ず」という弱点があることを指摘し、日本の中世仏教の解釈をめぐる近年の三つの論点「本覚思想」、「宗教改革」、「顕密体制」について詳しい解説をおこなっており、全体としてこのセクションは単なる入門書という枠には収まらない優れた専門書という顔を見せている。もちろん、オーソドックスな通史的歴史記述に慣れた読者のために、本書の末尾にはボディフォード自身による日本宗教史の詳細な年表がつけられている。

「主題」のセクションは恐らく本書の最も個性的な部分であるように思われる。ペイン論文は、日本における儀礼、象徴、芸術的表象を考えるための索出的概念として「儀礼的文化」(ritual culture) の重要性を強調するとともに、それが社会的に生みだされたものであることを指摘している。そこに含まれる宗教的象徴は、西欧の宗教伝統で考えられるような非歴史的で自律的なものではないとみており、その文化は教義を儀礼の前提とする西欧的宗教伝統や宗教研究を再考する可能性をもっているとしている。モレルは、和歌や源氏物語など日本の主に中世期を中心とした文学や語彙の背景にある神道、仏教などの影響を探るとともに、日本の文学を、それを作り上げた日本人自身の思想や感性に即して考えることの重要性を指摘している。アンブロスは、日本人のコスモロジーや聖なる場所と環境に対する態度を示しているものとして巡礼の重要性を指摘して、日本における巡礼形態、その研究史、霊山や神仏、四国遍路などを巧みに紹介している。ハーデカーは、日本の宗教の特徴の一つとして国家と宗教との密接な関係が指摘されるとして、古代から現在に至るまでの両者の関係の変遷史を時代別に的確にまとめている。カスリスは、日本の思想（哲学）史が西洋とは異なって仏教学、哲学、倫理学などの学問領域によってバラバラにおこなわれていることを、西洋における思想研究の学問的カテゴリーを具体的に引き合いに出しながら指摘し、その上で日本思想を研究する際の重要な文献と研究状況を説明している。彼の指摘は、我々があまり意識しない日本の学問的カテゴリーが欧米の初学者に混乱と戸惑いを与えていることに気づかせてくれる。川橋は、仏教における女性、女人禁制、新宗

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

教における女性の役割、水子供養など、日本宗教におけるジェンダー問題を概観しながら、ジェンダーと日本の宗教に関する研究は、ジェンダーとフェミニズムの理論のさらなる洗練と徹底したフィールド・ワークとの対話にあるとしている。限られた紙数と評者の能力不足で各論文の意図を十分に要約できなかったが、いずれの論文も日本宗教に対する新たな見方と問題提起をおこなっており、単なる概説や通史的な説明とはひと味違う本書の魅力を形づくっている。

「調査」のセクションも実践的で有益な情報が満載されている。この部分は、確かに地味だが、実際に研究をおこなう場合には最も頼りになるものであり、研究入門書の評価を決定する重要な部分の一つといえる。牧野のレファレンスに関する情報は使い勝手がよくできており、初学者が最初に知りたいと思う情報の収集に際して大きな威力を発揮するであろう。第一次資料に関する情報を扱ったルパートの担当部分も同様に使い勝手を考慮した書き方になっており、古文書などを有する研究機関へのアクセスの仕方からそれらの所在地までが地域別に整理されて解説されており、まさに痒いところに手が届くような配慮がなされている。フィールド・ワークを扱った部分は、執筆者シュネルの個人的なフィールド・ノートをのぞき見ているような錯覚を与えるほど、単なるフィールド・ワークの技術の伝達をこえた豊富な内容になっており、面白く読むことができる。

以上、ごく簡単に本書の内容を紹介してきたが、日本宗教の研究を志す海外の学生や研究者にとって、本書が出版されたことのもつインパクトは計り知れないものがあり、この出版を契機に海外の日本宗教の研究が質量ともに底上げされることは間違いないだろう。しかも、本書を、海外の学生や研究者ばかりでなく、日本の研究者にも是非一読をお勧めしたい。本書によって、海外での日本宗教の研究の水準やそれに携わる研究者たちのものの考え方の特徴を知ることができるという点はもちろんのこと、本書は異国の宗教の研究に取り組む際の様々な障害や発見を追体験できるという意味で異文化理解の生きた教科書のような趣きをもっており、本書を通じて日本の宗教とその研究方法を相対化できるように思われるからである。ややほめすぎた感もあるので最後に一つだけ注文をつければ、このガイドブック、少々分厚すぎて持ち運びに難があるように感じた。更にハンディな縮刷版の出版を望みたい。ともあれ、英語圏の読者に向けた日本宗教の研究ガイドブックの決定版が誕生したことを心から喜びたいと思う。

NII-Electronic Library Service